

氏名（本籍）	高田 治樹
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	博甲第 7383 号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	大学生サークル集団への態度変容過程の検討

主査	筑波大学教授	文学博士	松井 豊
副査	筑波大学准教授	博士（心理学）	佐藤 有耕
副査	筑波大学准教授	博士（心理学）	湯川 進太郎
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	岡田 昌毅

論文の内容の要旨

（目的） 本論文は、大学によるサークル集団への活動支援方略を導出するため、サークル集団への態度変容過程を検討することを目的とした。理論的検討を行った結果、サークル集団への態度変容過程を検討するうえで、以下の 3 点の検討点が指摘された。第一は、従来、組織への態度として扱われてきた組織コミットメントの概念を拡張し、否定的態度を含めてサークル集団への態度の構造を検討し、サークル集団への態度と個人の適応感ならびに集団における成果との関連を検討することである。第二は、企業組織において導出されている組織社会化モデルに基づき、サークル集団に入団する前から入団後までのサークル集団への態度形成過程を検討することである。第三は、単純な時間経過だけではなく、サークル集団の行事活動という出来事に着目し、サークル集団への態度変容過程を検討することである。

（対象と方法） 大学生および大学院生、専門学校生 3517 名を対象に、12 調査を行った。研究協力者の数は研究 1($N=24$)、研究 2($N=268$)、研究 3($N=353$)、研究 4($N=345$)、研究 5($N=371$)、研究 6($N=302$)、研究 7($N=331$)、研究 8($N=364$)、研究 9($N=459$)、研究 10($N=310$ ；但し、研究 12 と一部重複)、研究 11($N=131$)、研究 12($N=569$)であった。

（結果） 第一の目的に沿って、サークル集団への態度尺度の構造(研究 1、研究 2、研究 3)ならびに個人の適応感(研究 4)と集団における成果(研究 5)との関連を検討した。その結果、サークル集団への態度が 2 軸により構成され、3 つの態度群に大別される構造を持つことを明らかにした。また、個人の適応感と集団における成果は、サークル集団への態度の構造を構成する 2 軸と対応していた。

第二の目的に沿って、入団初期のサークル集団への態度形成過程を検討した(研究6、研究7、研究8)。まず、近接成果(研究6)、入団理由(研究7)、組織への初期評価(研究8)、情報取得行動(研究8)を測定する尺度を開発した。開発された尺度を用いて、企業組織の組織社会化モデルを参考にしてサークル集団への態度形成過程を検討した結果、入団理由と情報取得行動が、組織への初期評価に影響を及ぼし、さらに近接成果を経過して、サークル集団への態度に影響を及ぼしていた。

第三の目的に沿って、サークル集団への態度変容過程を検討した。その結果、サークル集団への態度を変容される行事活動の心理的成果と行事活動の内容との関連ならびに(研究9、研究10)、行事活動の心理的成果が短期的にサークル集団への態度に影響を及ぼすことを明らかにした。さらに、研究1から研究11までの結果に基づき、長期的なサークル集団への態度変容過程を検討した(研究12)。その結果、サークル集団への態度の変容を規定する要因が同定された。

(考察) 実証的検討の結果を踏まえ、3つの結論を導出した。第一に、サークル集団への態度が円環状に布置する6つの態度に分類され、それらが“受容－拒否”と“関与－無関与”の2軸により構成される構造を有する。第二に、入団初期のサークル集団への態度が、“受容－拒否”の軸に対応する近接成果である“成員からの受容”と、“関与－無関与”の軸に対応する“活動内容の理解”によって形成される。第三に、サークル集団への態度が時間経過とともに拒否的態度へと変容し、サークル集団からの退団につながる一方で、サークル集団に所属し続けることで、両面的態度を経過し、肯定的態度へと至る過程が生じる。以上の結論により、サークル集団を対象とした組織への態度の構造を明らかにし、大学生がサークル集団に入団する前からのサークル集団への態度変容過程を明らかにした。また、本論文の知見に基づき、大学が実施可能なサークル集団への心理教育的活動支援が、所属する学生と運営する学生の観点から提言された。

審査の結果の要旨

(批評) 大学生のサークル集団を組織社会化という視点から分析したオリジナリティある研究である。多くのデータに基づき、サークル集団への態度変容過程に関する理論的な枠組みを提供しており、大学による正課外活動支援にも有益な示唆をもつ論文と評価された。

平成27年1月27日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(心理学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。